

聖書：使徒の働き 7章 51～60節

説教：神の右に立つイエス

あらすじ

二千年前、エルサレムに建てられた最初の教会では、貧しいやもめのために食事の支援の働きをしていました。その責任者に選ばれたのがステパノという人です。彼は、ギリシャ語を話すユダヤ人の所に出向いて支援活動しながらご近所の人たちにキリストを伝道します。ところがダヤ人たちは気に入りません。とうとう彼を捕まえて、裁判所に訴えてしまいます。起訴理由はこうでした。自分たちが先祖から大切にしている神殿をこわしてモーセの律法を変えるようなことを堂々と民衆に語っている。彼は神に逆らう危険なテロリストである。

この訴えに対しステパノは、ユダヤ人たちも信じている旧約聖書を開いて、聖書が神を礼拝することや神殿のことについてどう教えているのかを語っていきます。結論はこうです。イザヤという預言者ははっきり語った。「神は人の手をつくったものには住まない。」つまり神は建物の神殿の中におられるのではない、ということです。

ユダヤ人は、神殿のなかに神が御臨在していると信じていましたから、建物の神殿をこわすなどとても許せる話ではありません。ところが聖書をよく読んだら神は神殿におられないとある。ということは神殿をこわす話をしたからと言って神に逆らうことにはならない。それが前回までのあらすじです。

今日の箇所ではそのステパノが殺されていきます。いろいろ疑問が湧きます。正しいことを主張したのになぜ彼は殺されるのか。

神は、正しい者がこのような目にあっているのに助けられないのか。そして彼が最期に語ったことばも疑問です。「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」自分を殺そうとする者のために、どうしてこんなことが言えるのか。そのことを考えてまいります。

1 いつも聖霊に逆らっている

1) 父祖たち

まず 51, 52 節のステパノのことばから考えます。「あなたがたは父祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっているのです。あなたがたの父祖たちが迫害しなかった預言者が誰かあったでしょうか。」

モーセは神から遣わされて、エジプトで苦しむイスラエル人を救い出し、ことあるごとに神のことばを人々に語り教えました。ところが、人々はつらいことや苦しいことが起きるとすぐにモーセに逆らい、あるときは金の子牛の象をつくってそれを拝み、お祭り騒ぎをし、神の怒りに触れることもありました。先ほどふれた預言者イザヤは最期はのこぎりでからだを引かれて殉教したと伝えられています。またエレミヤという預言者は、人々が聞きたくないことばを語ったために、穴に投げ込まれました。

2) あなたがた

ステパノに言われるまでもなく、ユダヤ人たちは父祖たちが預言者たちにひどいことを繰り返してきたことを知っています。それは間違っていたということも学んでいます。

そうしたらどうなりますか。反省するわけでは、自分たちは父祖たちと同じ過ちを繰り返してはいけません。父祖たちは愚かだったが、自分たちは違う。神殿で礼拝をきちんと守らなければならないと熱心に人々に教えていきます。ですから、神殿をこわすとは何事かと彼らが怒る理由はそれなりにあるのです。でも熱心であればすべてが正しいわけではありません。

ステパノはこう言いました。52 節後半、53 節。「今あなたがたが、この正しい方を裏切る者、殺す者となりました。あなたがたは、御使いによって定められた律法を受けたが、それを守ったことがありません。」

絶対に父祖たちのようはことはしない。これがユダヤ人たちの誇りでした。ところがステパノは、あなたがたは父祖たちと同じように、正しい方を裏切り、殺したと指摘します。いったいだれのことでしょう。モーセはこう語っていました。37 節。「神はあなたがたのために、私のようなひとりの預言者を、あなたがたの兄弟たちの中からお立てになる。」

もしこれがイエス・キリストを指すのであれば、確かにユダヤ人たちは正しい方を裏切り、殺したことになる。でもユダヤ人たちは認めません。いったいどちらが本当なのでしょう。ステパノは正しいことを語ったのか、それとも間違ったことを語ったのか。どうすればわかるのでしょうか。

2 ステパノ

1) 天が開けて、人の子が神の右に立っているのが見える

ステパノが殉教する直前に語った二つのことばに注目します。56 節。「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられる

のが見えます。」人の子とは、イエス・キリストのことです。それが見えているのはステパノだけです。ほかの人には見えていません。ひねくれた言い方かもしれませんが、何も証拠がありませんから嘘であるかもしれません。このままでは、ステパノのことばはすべてでたらめだと言われても、反論できません。

2) 主よ。この罪を彼らに負わせないでください。

では次のことばはどうでしょう。60 節。「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」このステパノの祈りは、主イエスが十字架の上で祈ったことばにほぼ似ています。

「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」(ルカ 23 章 34 節) 主イエスは自分を殺そうとするもののために祈っておられました。

なぜステパノはイエスと同じ祈りができたのでしょうか。ステパノが聖霊に満たされていたからでしょうか。すばらしい信仰者だったからでしょうか。それもあるでしょう。でも、ただそれだけだったのか。

無罪である自分、殺される理由など一つもないはずなのに、それでも殺そうとする人たちのためにこんな祈りができるのでしょうか。少なくとも私にはとてもできそうにありません。

3 イエス・キリスト

1) 神の右に立つ

ステパノは天を見上げて、人の子、すなわちイエス・キリストが神の右に立っておられると証言しました。

そのイエス・キリストは十字架で殺されました。それをみなが見ています。そのなきが

らは墓におさめられました。墓の前に番兵が立っています。だれも盗み出すことはできません。ところが日曜日の朝、墓に行ってみたらなきがらはなくなっています。イエスは墓からよみがえられ、四十日間、弟子たちの前に現れ、その後、天に上げられていったと十二人の使徒たちが証言しました。天に上げられたのですから、天を見上げたら主がそこに立っていたのが見えた、ということは一応辻褄が合います。

でも、それを聞いて多くの人たちは言うでしょう。「そんなことなどありえない。嘘だ。作り話だ。誰も証明できないじゃないか。」

2) 人の罪を赦す

イエス・キリストは、人々を救うために来られたはずなのに、人々から憎まれ、ねたまれ、最期は十字架に追いやられました。十字架の周りには怒りに満ちた人々が立っていて、こう叫びます。「人を救うというのならまず自分を救ってみろ。」「神の子であるなら、十字架から降りてこい。」好き勝手なことを叫ぶ人々の声の真ん中に十字架は立っています。その十字架の下では、イエスの下着が欲しくてローマ兵が賭け事をしていきます。主は、そのような人たちのために祈りました。

「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」

ステパノの周りには、自分を憎む者が石を手にして歯ざりししています。それを見たら、怒りと悔しき、そして恐怖で一杯です。とても人を赦すことなどできそうにもありません。

でも、ステパノが天を見上げたとき、神の右に立っておられるイエスを本当に見たのならどうでしょうか。ご自分のいのちを十字

架で投げ捨てるまでして、すべての人の罪を赦そうとする方です。その方の御顔が見えました。そうしたら何か起こるでしょう。ステパノの中に大きな変化が起きたのではないですか。

それまでは人を憎む心で一杯でした。悔しきで混乱していました。でもいますべてことは霧が晴れるようになくなり、光が射し込んでいます。人の罪を赦す光が満ちてきます。人を憎むのではなく、たとえ自分を殺そうとする者さえをも慈しむ、愛おしく思える心が与えられていきます。ステパノは苦しみの中で、主の愛をまざまざと味わっていきます。だから、あのように祈れたのではないか。決して自分の力で祈ったのではない。主の励ましがあつたから自然に祈れた。そう思うのです。

主は本当によみがえつたのか。主は本当に天に上げられたのか。ステパノは本当に見たのか。多く人は、誰も証明できないと言います。

でもステパノのことばが証しているのではないですか。死の間際に嘘をつく人がいるでしょうか。信仰者のふりをして体裁を整えようとする人がいるでしょうか。そんな余裕はありません。むしろ、その人のすべてが洗いざらい出て来るときです。ならば、ステパノのことばは真実であるということにならないでしょうか。

3) 主にお会いするとき

旧約にダビデという信仰者が出てきます。自分を殺そうとする者を赦さなければならぬ。そのことで非常に苦しんだ人です。ダビデでさえ苦しんだのですから、まして私たちが苦しむのは当然です。

先ほど私たちは主の祈りをいたしました。そこにはこうあります。「私たちの負い目をお赦してください。私たちも私たちに負い目のある人たちを赦しました。」本当に赦しているのでしょうか。そこだけ声が小さくなる。これが私たちではないか。まして自分に石を投げつけて殺そうとする者の罪の赦しを祈れません。これが私たちの現実です。

いったいいつ人を赦せるのでしょうか。赦せないまま死んでいくのか。赦せない心で苦しんでいる自分を、神はどう思っておられるのか。何もしてくれない。そう思ってしまうます。

でも今日教えられます。私たちはやがて主にお会いすることができます。その主の御顔を見たとき、私たちは自分の力ではなく、主の光をいただいて、人を赦すようになってく。いや、人を憎んでいたことさえ忘れてしまう。おそらく主にで会うとはそういうことなのだろうと思います。

世の人々は、死はすべての終わりで、何もなくなってただ灰になるだけと思っています。でもステパノは言いました。「主イエスよ。わたしの霊をお受けください。」死は終わりではないのです。死の先に主がおられます。もしそれが信じられるなら、今のこの時はどのようになるでしょう。確かに苦しみは目の前にあるかもしれない。解決されない問題があるかもしれない。神は何もしてくれないと不満をぶつけたくなるでしょう。でも、神は既にあなたのためにしておられたのです。十字架で、罪人である私たちのために祈ってくださっておられました。私たちがまだ主に出会う前に、いのちを捨ててくださいました。

それが真実であることを、今朝ステパノの

姿から教えられていきます。